Osaka University Knowledge Archive

Title	〈帝国＝家庭〉の「外」に人の暮らしを見いだすということ
Author(s)	林, 葉子
Citation	日本学報. 2014, 33, p. 79-82
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/27040
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

〈帝国＝家庭〉の「外」に人の暮らしを見いだすということ

林　　葉　子

「帝国は家庭なり」――徳富猪一郎

「越境と文化」をテーマとする今年度の日本学方法論の会の三つの報告は、生活の場における具体的な人間関係に着目しながら、越境の意味について論じるものであった。境界が作りだされると、一人一人の人間は否応なしに、その「内」か「外」かに位置づけられていく。しかし、そのような境界線が引かれることに抗い、あるいは、すでに引かれた境界を越えて人と人とが出会えるとしたら、それはいかにして可能なのか――本研究会で問われたことの一つは、いくつもの境界によって切り刻まれる人間関係の、回復の可能性であった。性別、階級、民族性、世代といった、さまざまな境界線によって分断される流れに抗して、人と人とが手を結びあう可能性が、具体的な事例から示された。

私は、この研究会の趣旨に強く賛同しつつ、ここであらためて、境界線が人々を「内」と「外」とに分け隔ててゆく暴力の苛烈さについても確認しておきたい。境界を越えた人々の出会いが尊いのは、それが容易なことではないからである。越境というテーマの重要性は、境界線の暴力性を意識した時にこそ、強く感じられるのではないだろうか。

いったん人々が「内」と「外」とに隔てられれば、境界の「外」に追いやられた者の痛みを「内」の人が想像するのは困難である。「内」の人は、しばしば自己保身のために、自らが「内」であることの正当性を言い募り、「外」の人々を不当に非難してその尊厳を傷つけてゆく。境界線を引く行為自体がはらむ暴力、そしてその境界線の強化のために新たに「内」から「外」へと加えられていく暴力について考えることは、その先にある越境の可能性を探るための前提となるだろう。

報告者の一人である冨永悠介氏は、沖縄・那覇出身の宮城菊氏と朝鮮・京畿道出身の鄭用錫氏が、なぜ沖縄でも朝鮮半島でもなく、台湾で出会うことができたのかと問う。冨永氏が本研究で焦点を当てたのが、宮城氏と鄭氏がそれぞれに置かれた過酷な状況の方よりも、むしろ二人の「出会い」であったというところに、私は、冨永氏の二人に対する深い敬愛の情を感じた。冨永氏は、宮城氏と鄭氏の「出会い」に真摯に向き合って、それを聴

き取り、描き出していくなかで、冨永氏自身も、聴き取りの相手である宮城氏と、たしかに出会っていくのである。

宮城菊氏は、沖縄の辻に「売られ」、さらに台湾に「売られ」て、台湾北部の港町・基隆へとたどりついた。私がその話を最初に冨永氏から聞いた時、反射的に思い浮かべたのは「からゆきさん」という言葉であった。しかし冨永氏自身は、宮城氏の生涯を、けっして既存の「からゆきさん」の物語の中に回収させようとはしない。そのような既存の枠を転用する安易さを排して、宮城氏の人生を丁寧に追うことによって、一度ならず「外」へとはじき出された人々が、厳しい条件の下にありながらも、いかにして人としての尊厳を保ちながらその状況を生き抜いていったのかを、探ろうとしている。

上地美和氏の報告は、沖縄から大阪への移動の後に厳しい生活を強いられた人々の暮らしを、「くず鉄」業界に焦点を当てながら描き出している。上地氏にとって、この「くず鉄屋」を営む大阪・大正区の「ウチナーンチュ」の歴史は、上地氏自身の家族の歴史でもある。

「くず鉄屋」という時の、「くず」という言葉の響きには、それを扱って仕事をする人々に対する差別的なニュアンスが、おそらく張り付いていたであろう。しかし上地氏は、その負の歴史性が削ぎ落とされた「スクラップ」ではなく、あえて「くず鉄」という言葉を引き受け、議論の前面に押し出している。人々がその「くず鉄」とともに生きてきたということ。そのように生きざるをえなかったということ。それにともなう喜怒哀楽が、すべて、人々の「生活史」である。そうした人々の暮らしは、しばしば経済的な困窮を伴うものであったことを上地氏は充分に知りながら、それを「下層」という表現の中に押し込めてしまうことを拒否している。ステレオタイプ化に抗い、「上」か「下」かの一つの物差しでは到底測りきれない人々の暮らしの、多面的で豊かな様相を、血の通った言葉を用いて描き出そうとしている。それはおそらく、これからも、必然的に時間のかかる試みであろう。しかし「越境」が単に抽象的な概念ではなく、人々が生きてきた現実でもある限り、そのような記述によってしか描き出せないものがあるはずだと、私も思う。

もう一人の報告者である鄭卉芸氏は、植民地台湾における廃妾論議について論じる際、問題の本質を言い当てて、妾となった女性たちが置かれた位置を「重層する『外地』」という言葉で表現した。このことから私が思い出したのは、以下に紹介する徳富猪一郎（蘇峰）の論説（「現今我邦婦人の地位」『東京婦人矯風会雑誌』1890年８月）である。

植民地台湾が帝国日本の「外地」と呼ばれていたことは、よく知られた事実であるが、妾という存在が「家庭」における「異邦人」だと表現されたことは、おそらく現在、ほと

んど知られていない。戦前の日本の言論界で強い発言力を持つことになった蘇峰は、「家庭」と「帝国」を重ねあわせながら、この論説の中で、次のように一夫一婦制を論じている。

> 帝国は家庭なり。一家に家風あるごとく、一国に世風あり。人倫の道は夫婦にあり（中略）しかるに日本の家内には一種の帰化人あり、一種の異邦人あり、之を名づけて妾という。妾は一人に向って定期の売淫婦なり。娼妓は多人に向って一時の売淫婦なり。故に一方よりいえば妾もまた娼妓なり。他方よりいえば娼妓もまた妾なり。我邦の家庭にはこの売淫婦を家の内において、もしくは家の外において蓄えおくなり

女性たちを分断し、その分断によって男性による女性支配を可能にしてきたのが〈母／娼婦〉の境界線であるということは、これまでも、くりかえし女性解放論者によって指摘され続けてきた。上記の蘇峰の主張においては、まさに〈母／娼婦〉の境界線が立ち現れ、その境界によって成り立つ「家庭」の「内」にいる〈母〉と、「外」にいる〈娼婦（「淫売婦」）〉のあいだに、妾という存在が位置づけられている。〈母〉でもあり〈娼婦〉でもあると見なされる妾は、そのように〈母／娼婦〉の境界を曖昧にする存在である。「妾もまた娼妓」であるとすれば、彼女たちは本来的には「外」の存在だとみなされるが、実際には「家の内」でも暮らしを営んでいる。1870年の新律綱領においては、妻と妾は同様に、二等親であった。1880年の刑法において妾名称は廃止されたが、戦前の日本においては姦通罪が女性側だけに適用されたので、既婚男性が妾を囲うことは珍しいことではなかった。「内」へと組み込まれた「外」としての妾――それを蘇峰は「異邦人」または「帰化人」に例えたのである。鄭卉芸氏が「重層する『外地』」と表現したのは、台湾という場が帝国日本の「内」に組み込まれた「外」として位置づけられ、そこで妾となった人々は、二重に「外」を生きねばならなかったからである。

蘇峰はまた、この「内」と「外」との関係において、「外」に位置づけられることの意味についても説明している。蘇峰によれば「人倫の道」から外れていく者は「人類」ではなく「物体」や「一種の器具」、あるいは「動物」であるという。そして彼は続けて次のように主張する。

> 吾人は何が故に上野動物園に婦人の出品なきやを疑う（中略）かの花街格子戸のごときは、毎夜その出品あるなり。これまた一種の動物園と言うべし

このように蘇峰は、「人倫の道」の「外」の存在は「人類」ではなく「動物」なのだから、そうした女性は「動物園」に展示されても不思議ではなく、すでに格子戸の内に女性がと

らわれている遊廓の様子は「一種の動物園」のようだと述べる。こうした表現からは、当時の〈母／娼婦〉の境界が、〈人間／動物〉あるいは〈人間／モノ〉の境界と重ね合わされていたことがわかる。

つまり〈帝国＝家庭〉の「外」に位置付けられることとは、究極的には〈人間の外〉への追放を意味しており、その境界設定自体が、排除の論理なのであった。現代を生きる者にとっては、蘇峰がこのような境界線の有り様を記述したこと以上に、こうした境界がすでに存在する世界では、すべての人々が、この境界線の持つ暴力性からなかなか脱却することができないという現実こそが、さしせまった問題であろう。そして、境界の「外」への排除が〈人間の外〉への排除を意味しているならば、「外」だと見なされた場所にも人間の暮らしがあるという、当たり前の事実を静かに描き出していくことが、その暴力に対抗していくための一つの有効な方法だと考えられるのである。

そのような意味で、杉原氏が企画し冨永氏と上地氏と鄭氏の三氏の研究発表を中心に展開された本研究会は、境界線の暴力を本質的に乗り越えるための方向性を指し示していると思われ、越境の希望を感じさせるものであった。「外」で生きた人々の暮らしを、当事者の言葉や文学作品から丁寧に描き出そうとするこれらの試みは、各氏が研究対象としている場所や時代がそれぞれに異なっているにもかかわらず、その問題意識において互いに結びついていることを強く感じさせるものであった。

〈帝国＝家庭〉の「外」に人の暮らしを見いだすということ――本当は、側にいる誰もがそれを目にしていたのに、見えていなかったその暮らしの現実を、あらためて聴き取り、埋もれた資料の中から拾い上げて描き出し、共有していく中で、私たちは少しずつ、すでに内面化してしまった境界線によって傷つけられた自分自身をも癒してゆくことになるだろう。

（はやし　ようこ　大阪大学大学院文学研究科助教）